

プロジェクト名： 公立芸術劇場におけるプロパー職員のマネジメントに対する意識調査——さいたま芸術劇場とキラリ☆ふじみ（富士見市）の事例研究

代表者：市橋秀夫（教養学部・教授）

1 研究の目的

本研究の目的は、1990年代以降に建設・開館され、さまざまな経営上の試行錯誤・改革がなされて運営されてきた公立芸術文化施設におけるプロパー職員の経験および意識を明らかにするべく、ライフ・ヒストリーまでも含めた聞き書き調査を開始して徐々に蓄積していくことにあった。本研究は、芸術文化施設におけるマネジメント改革の進展が現場レベルでどのような成果および課題をもたらしているのかを、長期的およびできる限り内在的な視点から理解し検討していくために不可欠な基礎的調査、という性格を持っている。

埼玉県下の二つの公立芸術文化施設は、自主事業に取り組む公立芸術文化施設として、全国的にも高い評価を受けてきている。また、一方は県、もう一方は基礎自治体の施設であり、二つの劇場の経験を比較分析することで、公立芸術文化施設のマネジメントの今後の課題を複眼的な視点から浮かび上がらせることができるのではないかと仮定に立って構想されたものである。

2 研究の進め方

本研究は、聞き取り調査によって行なうこととした。本研究で行なった聞き取り調査では、あらかじめ調査項目を狭く限定する方法をとることはしなかった。劇場マネジメントに対する現時点での意識だけを切り取って検討することが目的ではなかったからである。

本研究が採ったアプローチは、社会学的な調査というよりも、歴史学的な聞き取り調査である。ここでは、劇場マネジメントに対する個々の職員の意識や評価を、就業以前の個人史および長期的な職業履歴という職員個人人のライフ・ヒストリー経験という広い文脈に位置づけ、歴史的な視点から理解することが意図されている。

3 研究の成果と今後の課題

二つの芸術文化施設の職員経験者6名に対し、長時間インタビューを行なった（うち3名のインタビューは複数回にわたった）。被調査者それぞれのライフ・ヒストリーをおおむね時系列に聞き、記録し、文章に起こした。テープ起こしの作業にかかる費用と時間に制限があることから、この6名のいわば試行的なインタビュー調査からでも、それぞれの劇場のマネジメントの変容過程の概要を把握し、また以下のような特徴や課題の輪郭をある程度浮かび上がらせることができた。

さいたま芸術劇場の場合は、県の政治・行政上の変化と全国的な行政改革の全般的動向の変化が劇場全体のマネジメントの変容を大きく規定してきたといえるが、スタッフはそれらをいわば「所与のもの」として距離を保って受け止め、自らが携わる専門職務上のマネジメントに意識を傾けている。キラリ☆ふじみの場合には、地域の文化行政上の伝統と市民の要望が劇場のマネジメントの性格を最も強く規定してきているといえるが、日々の業務上のマネジメントにおいてもそれを中心課題として意識してきているように思われる。こうした意識の差異は、二つの芸術文化施設の歴史的な地域特性、成立過程、行政の文化政策、劇場の規模や専門分化の度合いといった構造的な要因に規定されているところが大きいと思われるが、今後も聞き取り調査を積み重ね、さらに検討を加えていくこととしたい。